

# 高齢者擬似体験による高齢者理解の可能性と限界

## — 実施時期による学習効果の違い —

竹田恵子\*<sup>1</sup> 兼光洋子\*<sup>1</sup> 太湯好子\*<sup>1</sup>

### 要 約

本研究は、装具を用いた高齢者擬似体験学習の体験の質を実施時期の違いから分析し、その体験学習による学習効果を高齢者理解の可能性と限界の側面から検討することを目的とした。対象は本学の看護学生107名である。分析は、体験学習後に記載したレポートをデータとして、高齢者施設での臨地実習および講義の後に体験学習を実施したI群(53名)と実習および講義前に実施したII群(54名)の体験学習を通しての学び内容について比較検討した。結果、以下のことが明らかになった。(1) 高齢者擬似体験は、身体機能面からみた高齢者理解に最も多く貢献していた。(2) 高齢者の立場から老いをみる視点や援助者としての目線・態度の育成に繋がった。しかし一方で、(3) イメージの固定化やパターンリズムに陥る危険性があった。(4) 97%の学生が体験学習における自己課題を達成させていたが、自己課題の内容および体験学習による学びは、体験の時期によって異なる傾向にあった。I群の学生は、実習で体験的に学んだ‘古い’の追体験を課題として臨み、既習の知識と今回の体験を統合し理解している。一方、II群の学生は‘古い’を身体機能や感覚機能の低下の側面から理解しようとしており、擬似体験によって身体的な機能低下とそれに伴う心理を実感することで、漠然としていた高齢者像がイメージ化できるようになっている。以上から、体験学習は、それ自体の効果と限界、実施の時期による学習効果の特徴を踏まえて計画し、体験後に学生の学びをフォローし、強化していく必要があることが示された。

### はじめに

人口の高齢化が急速に進む中、世帯構造の変化や家族機能の縮小もみられており、高齢者の介護問題は老後の最大の不安要因として認識されるようになってきた。このような状況の中、高齢者に対する看護の役割はますます重要になってきているが、その一方で看護を学ぶ学生が大学に入学するまでに高齢者と接する機会は減少している。学生にとって高齢者は心理的にも遠い存在となっていることが推測され、高齢者の状況に即した看護を展開する上で不可欠となる対象理解においても何らかの影響のあることが予測される。太湯ら<sup>1)</sup>は看護学生が老人に対して抱く否定的イメージに関与する要因を明らかにした上で、老人看護学の教育の中で組み込む体験の質の重要性を指摘し、高齢者理解のための効果的な教育方法の検討は重要な課題であると述べている。

高齢者理解においては、老化に伴う諸機能の衰退による特徴に加えて、豊かな人生経験からくる肯定

的な側面の両面からの学習が必要である。高齢者は他者に依存しながら自立する存在であり、その自立の仕方は非常に個別的である。筆者らが老年看護の講義や演習を通して常に学生達に伝えていることは、高齢者のもつプラスの力に注目し、自立に向けて援助する視点の重要性である。

高齢者擬似体験装具を用いた体験学習の効果については、これまでいくつかの研究が報告されている<sup>2-5)</sup>。筆者らも、平成8年度から、高齢者の身体的問題やそれに影響される日常生活、社会生活上の課題を理解することを目的に、2年次に履修する「老年看護学」の高齢者理解の単元で、高齢者擬似体験装具を用いた体験学習を実施している。これは講義による高齢者理解を補うために有効であり、老いを実感として理解できる一手段である。しかし一方で、強いインパクトで諸機能の低下を体験することから、日常生活の不自由さを強くイメージする。このため、体験的学びを活かし、高齢者の立場の理解や看護する側に求められる思いやりの視点を補完す

\*1 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 保健看護学科  
(連絡先) 竹田恵子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

ることが不可欠となる。

ところで、体験学習とは、体験と知識の統合を図ることを特徴とする学習方法<sup>6)</sup>であり、その学習効果は実施の時期、即ち、学生の学習過程に影響されると考えられる。しかし、体験の時期による学習効果の違いについて検討した研究は見当たらず、筆者らも実施の時期については、高齢者と直接的にふれあい、初めての援助の体験となる高齢者施設での臨地実習（以下、「ふれあい援助実習」）の前後のどちらが望ましいのかと苦慮してきた。「ふれあい援助実習」はカリキュラム上、看護学実習の第1段階の実習であり、「高齢者の理解についての講義」の前に行われている現状である。そのため、対象（高齢者）の理解、相手の立場に立った援助を行うという実習目標を達成する上で、高齢者体験を学習しておくことが有効なのではないかと考えた。そこで平成10年度までは「ふれあい援助実習」の後に実施していた体験学習を、平成11年度では「ふれあい援助実習」の前に試みた。

本研究は、高齢者擬似体験の実施時期による学習効果について分析し、その体験学習による高齢者理解の可能性と限界を知り、今後の教育活動に役立てることを目的に検討した。

## 研究方法

### 1. 対象

対象は、平成10年度および平成11年度に高齢者擬似体験を行った本学の保健看護学科学生107名（平成10年度実施者が53名、平成11年度実施者が54名）である。

### 2. 方法

#### (1) 高齢者擬似体験

高齢者擬似体験（以下、体験学習）は、平成10年度は「ふれあい援助実習」および「高齢者の理解（身体的、心理社会的、霊的側面からみた特徴）についての講義」の終了後に実施し、平成11年度は「ふれあい援助実習」および「高齢者の理解についての講義」の前に実施した（図1）。

体験学習の進め方は表1の1の通りであり、3名の学生が1グループになり、各学生が高齢者、介助者、観察者の3つの体験を交互に体験することになる。体験プログラム（課題メモ）は18グループが一

斉にスタートするため、混雑を避ける目的で12通りのものを用意した。各体験プログラムは、視覚、聴覚、運動機能、巧緻性の低下が体験できるように設定した。体験項目は10～15項目の課題から成り、「体験セットの装着」「封筒からカードを取り出す」「歩く」「トイレ体験（排泄動作、ペーパーを切る、水を流す）」「手を洗う」の5項目は必ず含めるようにした。なお使用した高齢者擬似体験装具は、長寿社会文化協会と東京ガス、大東京火災が共同開発した『うらしまたろう』<sup>7)</sup>であり、表1の2に示すような特徴をもっている。

#### (2) 調査方法

体験学習終了直後に、『高齢者擬似体験』レポートとして表1の3に示す内容について記載を求めた。学生にはレポートの記載内容を研究に使用する旨を説明し、了解を得た。平成11年度は、「ふれあい援助実習」の実習終了後に体験学習の実習への貢献について確認した。さらに高齢者との同居経験についても確認した。

#### (3) 分析方法

図1に示した学習過程からみた高齢者擬似体験の実施時期が異なる2群の体験の質について検討したいと考えて、平成10年度実施者をI群、平成11年度実施者をII群として、体験後に記載したレポートをデータとして比較検討した。自由記述された内容に関しては、研究者3名で協議し、コード化、カテゴリ化を行い、合意を得た段階でデータとして用いた。なお、検定には $\chi^2$ 検定を用いた。

## 結果

### 1. 対象の背景

#### (1) 高齢者との同居経験の有無と心理的距離

高齢者との同居経験と心理的距離について、平成11年度履修生に尋ねた。同居経験「あり」は29人（59.2%）、「なし」が20人（40.8%）であった。また高齢者の存在を身近に感じている者は28人（57.1%）であった。これを同居経験別にみると、同居経験「あり」の者は23人（79.3%）が身近に感じているのに対して、同居経験「なし」の者の75%は高齢者の存在を身近に感じていなかった。

#### (2) 高齢者に対する認識

率直な老人像を3つ尋ねたところ、表2に示すように身体機能に関するものに集中しており、精神機

H.10年度実施者（I群）：ふれあい援助実習 → 高齢者の理解（講義） → 高齢者擬似体験
H.11年度実施者（II群）：高齢者擬似体験 → ふれあい援助実習 → 高齢者の理解（講義）

図1 学習過程からみた高齢者擬似体験の実施時期

表1 高齢者擬似体験の概要

## 1. 体験学習の進め方

- (1) 1グループ3名の体験チームを作り、3名が交代で高齢者の擬似体験および介助者、観察者の体験をする
- (2) 各学生は、自分の選んだ課題メモの内容に従って擬似体験をする  
(体験時間は擬似体験セットの装着を含めて1人20分)
- (3) 体験終了後、『高齢者擬似体験』レポートを記入する
- (4) 擬似体験をしての学びについて、グループ討議と全体発表をする

## 2. 擬似体験セットの特徴

用具の装着により、「耳が遠い」状態、老眼、白内障による色覚変化、暗くぼやけて見える状態、前かがみの姿勢、肘や膝の関節の動きにくさ、爪先が上がりにくくなる状態、ものつかみにくさや握力が弱い等の運動の制限、手指の感覚機能が弱くなる状態、動作の緩慢さ、などが体験できる

## 3. 『高齢者擬似体験』レポートの内容

- |                 |                |
|-----------------|----------------|
| ・ 擬似体験を通しての自己課題 | ・ 介助体験での感想     |
| ・ 老人像           | ・ 高齢者に対する認識の変化 |
| ・ 体験項目          | ・ 自己課題の達成状況    |
| ・ 困難だった体験項目     | ・ 今後への展望       |
| ・ 擬似体験での感想      |                |

能に関するものは少なかった。最も多かったのは「動作緩慢」で94人(87.9%)であった。ついで「目や耳が悪い」などの感覚機能に関するものが多かった。この傾向は両群に共通していたが、精神機能に関するもののうち「温かな性格」を上げた者がII群に比してI群に多かった。また「動作緩慢」「危険度が高い」がI群に比してII群に多くみられた。

## (3) 自己課題

擬似体験を通して学びたい内容は表3に示すように、日常生活動作についてが73人(68.2%)と集中しており、老いの感覚・特徴や老いに対する心理については共に2割前後であった。群別では、I群がII群に比して老いに対する心理について、II群がI群に比して日常生活動作について学びたいという傾向がやや多くみられた他は、両群による違いはなかった。

## (4) 擬似体験での体験項目

各学生は12通りの体験プログラム(課題メモ)の中から無作為に選んだ1つの課題メモに従って擬似体験を行っている。学生が実際に体験したと捉えている項目は表4の通りであり必ずしも各課題メモに含まれた内容の全てが体験したとして認識されているわけではないが、両群に体験内容の大きな違いはみられなかった。

## 2. 体験学習で感じたことからの学び

## (1) 困難に感じた体験項目

困難に感じた体験項目について2つ尋ねた。その結果、階段昇降や暗所で文字を読むこと、文字の記入、お金の識別等が多く、2群間に差はなかった。

## (2) 擬似体験で強く感じたこと

擬似体験で強く感じたことについて、自由記載で

回答を求めた。表5に見るように、動作の困難さが44人(41.1%)で最も多く、次いで視聴覚障害に対する困難さ(36人, 33.6%)や老いへの理解(30人, 28.0%)についてであった。さらに動作の困難さや視聴覚障害に伴う気持ち、そこから派生する問題への関心もみられている。両群共に同様の傾向であったが、I群に比してII群において動作の困難さや視聴覚障害に関する記載が多くみられた。

## (3) 介助体験で強く感じたこと

自由記載の内容を整理した結果、介助の必要性の判断、介助のタイミングや内容の難しさに関すること(28人, 26.2%)、困難・危険・不安な動作への気づき(26人, 24.3%)、などの感想が多くみられた。2群間に有意な差はなかった。

## 3. 体験学習による学習の成果

## (1) 自己課題の達成状況

自己課題の達成状況の評価は、97%の学生が達成したと評価しており、2群間に違いはなかった。達成したと評価していない学生は3名であったが、いずれもその理由についての記載はなかった。

## (2) 高齢者に対する認識の変化

102人(95.3%)の学生が体験学習により老人に対する認識が変化したと答えている。変化した内容は、動作・行動の困難さの理解が54人(50.5%)と最も多く、老いや老化に対する認識の変化(22人, 20.6%)、老化(心理面)の理解(17人, 15.9%)が続いた(表6)。両群共に半数の学生が動作・行動の困難さの理解をあげていた。有意な差はなかったが、I群ではII群に比して老化(心理面)の理解や動作緩慢となる理由の理解が、II群ではI群に比して老いや老化に対する認識の変化が多い傾向にあった。

表2 老人像(3つ)

	全体 (n=107)	I群 (n=53)	II群 (n=54)	検定
身体機能に関するもの				
運動機能				
動作緩慢	94 (87.9)	43 (81.1)	51 (94.4)	*
身体機能の低下	10 (9.3)	8 (15.1)	2 (3.7)	*
巧緻性の低下	3 (2.8)	1 (1.9)	2 (3.7)	
危険度が高い	14 (13.1)	3 (5.7)	11 (20.4)	*
腰が痛い	2 (1.9)	1 (1.9)	1 (1.9)	
感覚機能				
目が悪い	34 (31.8)	19 (35.8)	15 (27.8)	
耳が悪い	40 (37.4)	18 (34.0)	22 (40.7)	
目・耳が悪い	5 (4.7)	4 (7.5)	1 (1.9)	
反応が遅い	4 (3.7)	1 (1.9)	3 (5.6)	
何度も聞き返す	2 (1.9)	—	2 (3.7)	
声大きい	4 (3.7)	2 (3.8)	2 (3.7)	
生理機能				
疲れやすい	10 (9.3)	5 (9.4)	5 (9.3)	
弱い	6 (5.6)	3 (5.7)	3 (5.6)	
精神機能に関するもの				
精神活動(積極的に動かない)	4 (3.7)	1 (1.9)	3 (5.6)	
認知機能(認知・理解力の低下)	12 (11.2)	7 (13.2)	5 (9.3)	
心理面(さみしがりや)	4 (3.7)	1 (1.9)	3 (5.6)	
性格				
温和	18 (16.8)	13 (24.5)	5 (9.3)	*
マイペース	6 (5.6)	3 (5.7)	3 (5.6)	
自己中心的	12 (11.2)	8 (15.1)	4 (7.0)	
その他				
外観(腰, 背)	12 (11.2)	3 (5.7)	9 (16.7)	
好感・プラスのイメージ	10 (9.3)	4 (7.5)	6 (11.1)	
嫌悪感・マイナスのイメージ	11 (10.3)	8 (15.1)	3 (5.6)	

\*: p&lt;0.05

( )内はnに対する%

表3 擬似体験で学びたいこと(複数回答)

	全体 (n=107)	I群 (n=53)	II群 (n=54)
身体機能の低下			
日常生活動作	73 (68.2)	32 (60.4)	41 (75.9)
動作の若者との違い	10 (9.3)	7 (13.2)	3 (5.6)
視覚機能	19 (17.8)	11 (20.8)	8 (14.8)
聴覚機能	12 (11.2)	6 (11.3)	6 (11.1)
老いに対する心理	20 (18.7)	13 (24.5)	7 (13.0)
老いの感覚・特徴			
老いの世界・感覚	26 (24.3)	13 (24.5)	13 (24.1)
老人の特徴	2 (1.9)	—	2 (3.7)
その他			
援助のあり方	12 (11.2)	5 (9.4)	4 (7.4)

( )内はnに対する%

## (3) 今後への展望

今後の老人へのかかわりについて感じたこととしては、諸機能の低下を念頭においた介助の必要性が45人(42.1%)と最も多く、次いで、見守ることや待つことが40人(37.4%)、介助の必要性を見極めることの大切さが27人(25.2%)であった(表7)。2群

の比較では、II群に比してI群で諸機能の低下を念頭においた介助の必要性に関する意見が多かった。一方、見守ることや待つこと、相手を知ること・相手の立場に立つこと、介助の必要性の見極めの大切さに関する意見がII群においてI群よりも多く認められた。

表4 体験した項目の実際

	全体 (n=107)	I群 (n=53)	II群 (n=54)
1. 体験セットの装着	105	51	54
2. 封筒からカードを取り出す	96	47	49
3. 歩く	106	53	53
4. トイレ体験	103	52	51
5. しゃがむ	48	17	31
6. 階段昇降	83	45	38
7. エレベーター	53	26	27
8. エスカレーター	27	14	13
9. 飲み物を飲む	52	24	28
10. 蓋を開ける	22	9	13
11. 入浴体験	3	1	2
12. 買い物をする	27	17	10
13. 会話をする	85	42	43
14. 記入する	75	40	35
15. 電話をかける	38	18	20
16. 絞る	6	1	5
17. ものを探す	35	15	20
18. 新聞や雑誌を読む	33	15	18
19. 拭く	13	5	8
20. 自動販売機	20	10	10
21. 椅子に座る	56	34	22
22. 手を洗う	81	40	41
23. 表示や時計を見る	51	29	22
24. お茶を入れる	26	14	12
25. 開き戸を開閉する	14	5	9
26. 車椅子を押す, 自走する	7	5	2
27. ホッチキスを使う	10	4	6
28. カバンを持つ	8	6	2

表5 擬似体験で強く感じたこと(複数回答)

	全体 (n=107)	I群 (n=53)	II群 (n=54)	検定
動作の困難さ	44 (41.1)	13 (24.5)	31 (57.4)	***
動作の困難さに対する気持ち	21 (19.6)	8 (15.1)	13 (24.1)	
動作に対する若者との比較	15 (14.0)	4 (7.5)	11 (20.4)	
視聴覚障害に対する困難さ	36 (33.6)	13 (24.5)	23 (42.6)	*
視聴覚障害により派生する問題	11 (10.3)	5 (9.4)	6 (11.1)	
視聴覚障害に伴う気持ち	18 (16.8)	11 (20.8)	7 (13.0)	
老人の心理	7 (6.5)	3 (5.7)	4 (7.4)	
老いへの理解	30 (28.0)	15 (28.3)	15 (27.8)	
環境との関連・環境の大切さ	5 (4.7)	2 (3.8)	3 (5.6)	
具体的場面での思い	20 (18.7)	13 (24.5)	7 (13.0)	
体験全体を通した印象	11 (10.3)	6 (11.3)	5 (9.3)	
グッズ・体験への疑念	1 (0.9)	1 (1.9)	-	
その他	3 (2.8)	1 (1.9)	2 (3.7)	

\*: p&lt;0.05, \*\*\*: p&lt;0.001

( )内はnに対する%

## 4. 体験学習の臨地実習への貢献

体験学習が「ふれあい援助実習」において役に立ったか否かを自由記載で尋ねたところ、延べ87の回答があった。体験学習を肯定的に捉えている意見は延べ77、役に立たないなど否定的に捉えているものが10であった。肯定的に捉えているものでは、老化

(身体的変化)に関する学びからの貢献が最も多く、次いで視聴覚障害に関する学びからの貢献であった。その他、老い・老化に対する認識や老化(心理面)に関する学びからの貢献があげられた。一方、否定的な捉え方では実際に接することが一番といった意見が多かった。

## 考 察

1. 対象の特徴と体験学習の実施時期別にみた学び  
 高齢者との同居経験がある学生は6割であり、4割の学生は同居経験がなく、その内の4分の3は高齢者を身近な存在と感じていないことが明らかになった。これはII群の学生に対してのみの結果であるが、過去に高齢者との同居経験がある学生が約半数、日常生活において高齢者に接する機会がある学生は20%台であるという丸橋ら<sup>5)</sup>の研究結果とはほぼ一致している。日常生活の中で高齢者に接し、高齢者を理解する機会が少ない状況は、現代の学生に共通した状況といえよう。

体験学習前に学生が抱いていた高齢者に対する認識は、2群共に動作の緩慢さや感覚機能に関することに集中しており、精神機能に関するイメージなど高齢者の内面に関連したものは少なかった。「ふれあい援助実習」で高齢者と出会った経験をもつI群に「精神機能に関するもの」がやや多かったことから、これらの結果は学生の高齢者との接点の少なさと無関係ではないと推察される。また、大半の学生が体験学習における自己課題として「日常生活動

作の困難さや緩慢さの理由」などの理解をあげていた。これは体験学習で使用する装具が身体機能の低下を体験できるという情報にも影響されていると思われる。I群の4分の1の学生が「老いに対する心理」を自己課題としてあげており、II群に比してやや多い傾向にあった。I群は「ふれあい援助実習」で実際に高齢者に出会い、ふれあうことを通して、対象（高齢者）を体験的に理解した後に、身体的、心理社会的、霊的側面から高齢者の特徴について講義を受け、体験学習に臨んだグループである。学生たちは体験学習を通して実習で出会った高齢者の‘老い’を追体験しようとしているのではないだろうか。一方II群は、対象を理解するための学習の導入として体験学習が用意されている。II群の学生たちは、未知である‘老い’を比較的イメージしやすい身体機能および感覚機能の低下の側面から理解しようとしていることがうかがえる。

体験学習は2群共に12通りの課題に基づいて実施した。その結果、個々の学生によって体験項目の違いはあるものの全学生が、加齢に伴う身体的な変化とそれによって生じる日常生活行為や動作上の困難さを体験しており、両群の学生は同質の体験をした

表6 認識変化の内容

	全 体 (n=107)	I 群 (n=53)	II 群 (n=54)
老化（身体的変化）の理解			
動作緩慢となる理由の理解	15 (14.0)	10 (18.9)	5 ( 9.3)
動作・行動の困難さの理解	54 (50.5)	27 (50.9)	27 (50.0)
視聴覚の障害を理解	13 (12.1)	6 (11.3)	7 (13.0)
老化（心理面）の理解	17 (15.9)	11 (20.8)	6 (11.1)
老い、老人に対する認識の変化	22 (20.6)	7 (13.2)	15 (27.8)
積極的介助への気持ちの芽生え	6 ( 5.6)	2 ( 3.8)	4 ( 7.4)

( )内はnに対する%

表7 今後の老人へのかかわりについて

	全 体 (n=107)	I 群 (n=53)	II 群 (n=54)	検 定
見守る、待つ	40 (37.4)	9 (17.0)	31 (57.4)	***
必要性の見極め	27 (25.2)	8 (15.1)	19 (35.2)	*
相手の立場に立つ	17 (15.9)	6 (11.3)	11 (20.4)	
相手を知る	7 ( 6.5)	—	7 (13.0)	**
コミュニケーションが大切	4 ( 3.7)	—	4 ( 7.4)	*
気遣いや介助が必要	9 ( 8.4)	4 ( 7.5)	5 ( 9.3)	
諸機能の低下を念頭においた介助が必要	45 (42.1)	32 (60.4)	13 (24.1)	***
援助の方向	18 (16.8)	8 (15.1)	10 (18.5)	
理解をさらに深めたい	2 ( 1.9)	—	2 ( 3.7)	
正しく理解し、手を差しのべられる	14 (13.1)	8 (15.1)	6 (11.1)	
学生自身の課題	6 ( 5.6)	1 ( 1.9)	5 ( 9.3)	
物的環境を整える必要性	2 ( 1.9)	2 ( 3.8)	—	
その他	3 ( 2.8)	3 ( 5.7)	—	

\* : p&lt;0.05, \*\* : p&lt;0.01, \*\*\* : p&lt;0.001

( )内はnに対する%

といえる。擬似体験の学びは、動作の困難さや視聴覚障害に関すること、老いへの理解についてのものが多かった。また、困難さや障害に伴う気持ちや派生する問題へも関心が向けられていた。これは2群に共通しており、擬似体験は身体機能面からみた高齢者の理解にとどまらず、高齢者の心理・社会的側面での理解を促すことにおいても効果があるといえ、他の研究結果<sup>2-5)</sup>に一致する。またI群に比してII群で動作の困難さや視聴覚障害に関する記述が多かったことの一要因として、自己課題との関係が考えられる。老いは徐々に進行するものであり、高齢者は老化による諸機能の低下を一度に体験するわけではない。しかし高齢者擬似体験装具の装着は、一時的ではあるが一瞬にして身体機能の低下をもたらす。動作の困難さや視覚の障害等の体験は特にインパクトが強く、「高齢者の理解」についての学習が行われていないII群の学生にとっては、強烈な印象として残っている可能性がある。

介助体験からの学びでは、2群に共通して、介助の必要性の判断、介助のタイミングや内容の難しさに関すること、困難・危険・不安な動作への気づき、目が離せないなどがあげられた。また、グループ討議の発表の中で、「高齢者体験をしたときに介助者にして欲しいと思ったことを、介助体験の時に行ってみたら高齢者体験をしている人から安心できたと言われた」「介助者が高齢者に具体的に説明している様子を見て、具体的説明が安心に繋がっていることがわかった」等の意見も出されている。各学生が高齢者体験に加えて介助者体験や観察者体験の3つの課題を行ったことは、高齢者理解と同時に、援助者としての目線や態度を育てることに有効であると考えられる。

さらにほとんどの学生が、体験学習における自己課題を達成できたと評価すると共に、体験学習によって高齢者に対する認識が変化すると回答していた。その認識の変化は、老化による身体的変化の理解や「好きで“老人”をしているわけではない」など老い・老化に対する認識の変化、視聴覚障害に対する理解、老化の心理的側面の理解、積極的に介助したい気持ちの芽生えなどであった。これらは2群に共通していた。また、I群では老化の心理的側面の理解や動作緩慢となる理由が多く、II群では老いや老化に対する認識の変化が多い傾向にあった。今後の展望として2群に共通してみられた意見は、相手を知ること、相手の立場に立つこと、介助の必要性の見極めの大切さ、諸機能の低下を念頭においた介助の必要性、などであった。またI群では、諸機能の低下を念頭においた介助の必要性が、II群で

は相手を知ること、相手の立場に立つこと、介助の必要性の見極めの大切さが意見として多数あげられていた。以上より、体験学習は高齢者の立場から老いをみる視点を育成する上で有用であったと考えられる。そしてその学びの内容は、体験学習の時期によって異なることが明らかになった。即ち、I群の学生は、「ふれあい援助実習」で実際に高齢者に出会い、関わりあった際に理解し切れなかった心理的側面や身体的な機能低下の理由を、その後の講義や今回の体験学習を通して統合させ理解しようと努力していた。そして援助者としての視点を育もうとしていると思われる。一方、対象理解の導入段階にあるII群の学生は、老いを擬似的に体験することによって、身体的な機能低下とそこから派生する思いを実感し、漠然としていた高齢者像が身体面を中心にイメージ化できるようになってきたのではないかと思われる。また援助をする際、相手の立場に立つことの重要性に気づくことができているといえる。そして体験学習での学びはその直後に実施された「ふれあい援助実習」で活用されているが、体験的に学んだことを実習後に学ぶ講義を通して知識的に裏打ちし、統合するという課題がこの段階で残されていることになる。

## 2. 高齢者擬似体験による高齢者理解の可能性と限界

体験学習は、看護教育においても人間の態度や言動が絡んでいる情意領域の学習において効果を発揮する<sup>6)</sup>。さらにシミュレーションは、擬似的状況の中で学生がその状況と関わるプロセスで、自分のもっている能力を総動員させ、思考のみならず感情も行動も伴う総合学習ができるというメリットをもつ<sup>8)</sup>。我々の行った『高齢者擬似体験』は、教師の用意した課題に沿って体験学習を進めるという点でシミュレーションの要素をもっており、本演習においても学生の学びは高齢者の身体的な特徴のみならず心理的側面の理解、援助者としての視点の育成へと発展していることが明らかになった。しかし一方で、体験の時期によって学びの内容・広がりには違いがあることが分かった。これは学生の知識や動機づけが学びの時期によって異なることが大きな要因として考えられるが、体験を通しての学びは学生個人の主観的なものであり、感じ方、受け取り方にも個人差があることも関与している。また、高齢者理解の導入段階で体験学習を行う場合には特に、そのインパクトの強さ故に身体的側面への関心に偏りやすく、さらにイメージの固定化、パターンリズムに陥りやすいと考えられる。また、「負の体験」に偏ると

加齢や健康障害が、欠損状態として意識される危険性もある<sup>8)</sup>。これらのことは体験学習の限界でもあり、体験学習の効果を高めるために教師は、学生が学びを言語化して表現し、既習の知識を使って体験したことを整理することができるように助ける必要がある。筆者らもグループ討議と全体発表を通して学生の学びを整理し、強化している。体験学習を展開する際には以上のことを踏まえて、体験後に学生の学びをフォローし、強化していくことと、学習時期による学習効果をふまえて体験学習を展開していくことの必要性が明らかになった。

### ま と め

高齢者擬似体験による高齢者理解の可能性と限界を知ることを目的に、学習時期の異なる2群の学生の『高齢者擬似体験』レポートを比較分析した結果、以下のことが明らかになった。

1. 学生が日常生活の中で高齢者に接し、高齢者を理解する機会が少ない状況にあることが明らかになった。
2. 体験学習前的高齢者に対する認識は、2群共に動作の緩慢さや感覚機能に関することに集中していたが、II群に比してI群で性格を穏和とイメージした学生が多かった。
3. 大半の学生が体験学習での自己課題として、日常生活動作の困難さや緩慢さの理由などの理解をあげていた。さらにI群の学生たちは体験学習を通して実習で出会った高齢者の

‘古い’を迫体験しようとしており、II群の学生たちは‘古い’を身体機能や感覚機能の低下の側面から理解しようとしていることが推察された。

4. 擬似体験は、身体機能面からみた高齢者理解に最も多く貢献していた。また、高齢者の立場から老いをみる視点の育成、援助者としての目線や態度の育成に繋がっていることが示された。しかし一方で、イメージの固定化、パターンリズムに陥らないことへの配慮も重要になってくると考えられる。
5. ほとんどの学生が、体験学習での自己課題が達成され、高齢者に対する認識が変化していた。そして学生の学びの内容や広がり、体験学習の実施時期によって違いがあることが明らかになった。I群の学生は、実習で体験的に学んだことを講義で得た知識と今回の体験を統合し理解している。II群の学生は、老いの擬似的体験によって、身体的な機能低下とそこから派生する思いなどを実感し、漠然としていた高齢者像がイメージ化できるようになった。さらにその学びは、直後に実施された「ふれあい援助実習」で活用されていた。
6. 体験学習はそれ自体の効果と限界、体験の時期による学習効果の特徴を踏まえて計画し、体験後に学生の学びをフォローし、強化していくことが必要であると考えられる。

### 文 献

- 1) 太湯好子, 酒井恒美, 杉田明子, 初鹿真由美 (1991) 看護科学生が抱く老人のイメージ, 川崎医療技術短期大学紀要, **11**, 7-11.
- 2) 佐藤弘美, 永江美千代, 黒田久美子, 正木春恵, 野口美和子 (1993) 老人理解のための体験学習 - INTO AGING -, 看護展望, **18**(8), 880-884.
- 3) 宮地 緑, 赤木知子 (1993) 老人看護学演習における老いの体験学習, 看護教育, **34**(11), 865-870.
- 4) 冨田ゆき恵, 沼本教子, 岡本妙子 (1996) シミュレーションゲームによる「老年期を生きる」体験学習の効果の検討, 聖隷クリストファー看護大学紀要, **4**, 29-43.
- 5) 丸橋佐和子, 高山成子, 宮本裕子, 森田敏子, 酒井明子, 小泉素子, 高柳智子 (2000), 装具を用いた擬似体験による老人看護教育方法の開発に関する研究, 福井医科大学研究雑誌, **1**(1), 77-86.
- 6) 犬塚久美子 (2000) 第4章 体験学習. 藤岡完治, 野村明美編, わかる授業をつくる看護教育技法3 シミュレーション・体験学習, 第1版, 医学書院, 東京, pp133-144.
- 7) 杉山政廣 (1999) 高齢者擬似体験システム『うらしまたろう』の開発と活用状況, 厚生, 7月号, 24-27.
- 8) 野村明美 (2000) 第2章 シミュレーション. 藤岡完治, 野村明美編, わかる授業をつくる看護教育技法3 シミュレーション・体験学習, 第1版, 医学書院, 東京, pp83-87.



# Understanding the Problems of the Elderly through a Simulation Experience — Difference in the Effect between Before and After Clinical Practice —

Keiko TAKEDA, Yoko KANEMITSU and Yoshiko FUTOUYU

(Accepted Jun. 7, 2001)

Key words : UNDERSTANDING OF THE ELDERLY, NURSING STUDENT,  
SIMULATION EXPERIENCE, TIMING OF THE EXPERIENCE

## Abstract

This study was conducted to determine the learning experience of nursing students who went through a simulation process of becoming old, i.e. wearing earplugs to simulate loss of hearing, glasses to simulate loss of vision, etc. One hundred seven students were asked to perform activities under these simulated conditions, and then filed a report on what they had experienced. The reports of the two groups were analyzed. The students of the first group (N=53) experienced it after clinical practice contact with the elderly and the second group (N=54) experienced it before. The findings were as follows: (1) The simulation experience was useful for improving their understanding of the social and psychological problems of the aged, as well as physical aging in the elderly. (2) The experience changed their viewpoint toward aging and what the nurse's role is. (3) On the other hand, it is possible that their ideas about the elderly became to fixed. (4) There were differences between the two groups regarding what they learned and wanted to learn. These results suggest that the simulation experience should be conducted taking into consideration the effects, limitations and timing of the experience so that students attain a better understanding of the elderly.

Correspondence to : Keiko TAKEDA

Department of Nursing, Faculty of Medical Welfare  
Kawasaki University of Medical Welfare  
Kurashiki, 701-0193, Japan

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.11, No.1, 2001 65-73)